

巻頭言

東西冷戦終結後の1990年代が、当初の期待と異なって、新たな平和の時代とは掛け離れた、新たな紛争の時代になっていることは、こんにち、多くの人々が実感していよう。地域紛争、民族紛争は世界のいたるところで頻発して、おさまりそうもない。それに関連して、難民問題もますます深刻化しているし、人権問題も噴出している。

しかし、世界が当面している難問は、むろんそれだけではない。社会的側面に限って言えば、人口問題、エイズの問題などが緊急に対応しなければならない問題として、すでに冷戦時代から大きく浮上している。

地球環境問題も、むろんこれらと並んで、あるいはこれらの問題以上に、重大である。近年、急激に進行しつつある地球環境の破壊は、人類全体の生存そのものを危うくするからである。しかも、地球環境問題への対応は、一国レベルの努力だけでは不十分であって、国際的な協力体制のもとでの取り組みが不可欠である。

それにもかかわらず、国際社会が地球環境問題への取り組みに向けて動きはじめた時期は、あまり早かったとはいえない。たとえば国連が地球環境問題に関する会議を開いたのは1972年6月のストックホルム（国連人間環境会議）が最初で、国連環境計画（UNEP＝本部はナイロビ）がこれを機に設立されたのも、むしろ遅きに失したといつてよいくらいである。1992年6月にリオデジャネイロで開催された地球サミット（環境と開発に関する国連会議）以降、地球環境保全問題は、開発問題との関連において、さらに真剣に論議されるようになり、具体的な行動指針も示されるようになってきているが、まだまだ地球環境問題への取り組みは、その初期的段階さえ通過したとはいえない状況にある。

敬愛大学国際学部（国際協力学科）は地球環境問題をカリキュラムのなかの重要な柱の一つとしており、この問題の研究を一層発展させることを目指して、環境情報研究所を付置しているが、同研究所は千葉敬愛短期大学時代に設置されてから数えて6年目を迎え、その研究成果の一部を収録した機関誌『環境情報研究』も、ここに第5号を発行する運びとなった。お読み頂いて、ご意見、ご批判など頂戴できれば幸いである。

1997年4月

敬愛大学国際学部長 小田英郎